

試験範囲外

非市場的組織についての補足

この講義，新古典派，
組織の経済学の比較

参考

組織とは？

■ 組織 (Organization)

- ただ単にいろんなものが集まっただけではなく，それらが有機的 (organic) な総体性をなしていなければならない。
 - 部分が変われば全体が変わり，全体が変われば部分が変わる。
 - 全体と部分とは一体のものである。

参考

社会的組織とは？

■ 社会的な組織

- 社会がこのような有機的な総体性になっているということ
- 以下は本来の社会的組織とは言えない。
 - もし，前近代的共同体のように，個人が全体に埋没してしまっているならば，全体はあっても，その有機的な部分はない。
 - もし，市場のように，個人がバラバラであるならば，部分はあっても，その有機的な全体はない。

参考

1. 市場と組織との関係

参考

新古典派経済学の場合

前提

市場

条件

市場の失敗

例外的

結果

非市場的組織 (= 企業)

例外的

参考

コースの場合

前提

市場

条件

取引費用の節約

通常的

結果

非市場的組織 (= 企業)

代替的

参考

この講義の場合 (組織の位置付け)

労働組織一般 必然的

市場という非組織的な組織 必然的

資本主義的営利企業 必然的

参考

ロナルド・コースの調整

- 効率的資源配分を達成する調整 (coordination) について

1. 市場

- 価格メカニズム

⇕ VS

2. 組織

- 権威 (authority)

参考

コースの権威の特徴

- 権威は企業家と一体のものである。
- 権威と計画とが並立しない。
 - 市場の無計画性の下での価格メカニズムのフィードバック的な役割と対比されるのは、非市場的組織では生産実行中における権威が対応するしかない。
 - 非市場的組織におけるフィードフォワード的な計画の役割は権威 (企業家) に吸収される。

参考

この講義の権威の特徴

- 一般的に、権威は労働から生まれる。
 - 根拠：個人的労働における自分の意志
 - 条件：社会的労働の調整
- 特殊的に、資本主義的生産の下では、下からの意志を取得して、上から押し付ける。
- 資本主義的生産のもとでは権威の根源は人格ではなく資本という物件にある。
 - 誰が資本家になろうと誰が経営者になろうと、従業員は会社の業務命令に従う。
- 権威と計画とがワンセットになっている。

参考

コース (組織の経済学) の 調整の特徴

- 分業と、それに基づく専門化から調整の必然性が導出される。
 - 市場は社会的分業のシステムなのだから、非市場的組織についてもまた、企業内分業が出发点になる。

参考

この講義の調整の特徴

- 管理労働として調整を把握する。
- 調整の必然性は協業から (したがって単純協業においても) 導出される。

参考

コースの組織の特徴

- 市場が大前提=フィードバックが大前提
- 組織は市場取引の結果として生じる費用（取引費用）を節約する。
- 市場と非市場的組織とは代替的
 - 市場を利用する代替案（取引費用を含む）と非市場的組織を利用する代替案とを比較して、安い方を選ぶ。

参考

この講義の組織の特徴

- 労働が大前提=フィードフォワードが大前提
- 市場もまた一つの組織
 - ただし、非有機的=非組織的な組織
 - 市場は労働の成功でもあり労働の失敗でもある。
 - 『4. 市場社会のイメージ』
- 市場において非市場的組織は必然的

参考

2. 非市場的組織の形成要因

参考

2.1 主流派経済学における把握態度

参考

主流派経済学における組織発生

- 取引費用論
 - 取引費用の存在
- 規模の経済性論
 - 収穫逦増の存在
- プリンシパル・エージェンシー論
 - 私的所有の存在

参考

2.2 この講義の立場

参考

2つのタイプの非市場的組織

- 現代株式会社を考察する限りでは、
 1. 社会的労働の物件的組織
 - 会社内の労働組織
 2. 私的所有者の人格的組織
 - 資本家（＝株主）の組織
 - 会社間の組織（いわゆる産業組織）
- プリンシパルエージェンシー論や取引費用論が想定しているのは「2」
- ここでは、歴史的にも理論的にも2に先行するものとしての、1に即して考察する。

参考

資本主義的生産が成立するための最低資本量

- 本来の資本主義的生産においては、
 - 資本家は資本家の労働以外の労働をしない（直接的労働は賃金労働者だけが行う）。
 - （資本家の労働の賃金部分を越える）利潤の大きさがかなり大きくなければならない。
 - 資本家が労働者からは区別された階級として確立するため
 - それだけではなく、資本家が資本運動のエージェントとして、自分の消費分を越える部分を蓄積基金に充てるため
- もともと資本主義的生産は、かなり多額の必要最低資本量とかなり大人数の賃金労働者とを必要とする。
 - その限りでは、資本主義的営利企業を必要とする

参考

歴史的な前提と中間形態

- 中世では、親方が雇い入れることができる徒弟（弟子）の数は人為的に制限されていた。
- 現在でも、たとえば、5人程度の賃金労働者しか雇っていない町工場では、資本家は賃金労働者と同じ直接的労働を行っているものであり、本来の資本主義的な生産とは言えない。

参考

資本家の労働

⇒ 資本の私的所有者として果たすような（本来は資本の私的所有者でなければ果たせないような）労働のこと。

1. 生産過程における指揮監督労働
 - 資本家にとって生産過程は、自分の私的所有物である生産手段を、自分が時間決めて買った労働力によって適切に使わせる過程である。
2. 流通過程における売買労働
 - 市場では、他の私的所有者と同様に、商品／貨幣の私的所有者として通用することが必要である。

- どちらも、やがては賃金労働者に委譲される

参考

労働組織の自然発生

1. そもそも本来の資本主義的生産の下では数多くの賃金労働者が一緒に労働している。
 - 剰余価値の総量の追求
 - 共同の利用による生産手段の節約
 2. 金儲けという共通目的のもとに働くように資本家が監督する。
 3. もともと人間は協力によって効率化を達成することができる。
- 以上の三つの要因の結合によって、自然発生的に、賃金労働者間での協力、つまり協業、したがって社会的労働の組織が生まれる。
 - もともとは、生産力を高めるために資本家が労働組織を意図的に選択したわけではない。

参考

労働組織の意図的採用

- 賃金労働者間での協力に適した労務管理の方法が経験的に見付かると、協業は、つまり社会的労働の組織は、もはや自然発生的なものではなく、資本家が意識的に採用するものになる。
- そうなると、『6. 生産力の上昇』で見たような、普及の過程をたどる。

参考

現代的産業の下では？

- 現代的産業の下では、機械設備の体系が最初から客観的に、労働者間での協業を必然化している。
 - 生産力を高めるために資本家が労働組織を意図的に選択したわけではない。
- しかもまた、機械設備の体系に労働者を配置すると、そこからまた個々の労働者によるチームプレイの工夫によって自然発生的に労働組織の変革が生まれる。

参考

結局どういうこと？

- 出発点をとってみても、現代的産業を考えてみても、労働組織形態はスケールメリット（労働の社会的生産力）とは独立に発生すし、そしてそれを資本が意図的に採用するようになる。

参考